

---

# Rising stars

RSライター

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

R i s i n g   s t a r s

### 【Nコード】

N 2 7 8 2 M

### 【作者名】

R Sライター

### 【あらすじ】

串灘 遥（20歳）は仕事の依頼のためとある男を搜まんまと奴隷商人に捕まってしまう。しかし、そこをとうりすがり（？）の竜人に助けもらうが…！？

始まりは劇的！！（前書き）

どうも、私の書く話にお付き合いくださいませありがとうございます。

何分まだまだ新人ですので温かい目でみていただけるとありがたいかぎりです。

Rising stars 第一作目楽しんでいただけることを祈ります。

できれば、感想や、評価いただけるとありがたいです。

始まりは劇的！！

あなたは知っているだろうか…

「銀色の長い髪」、「青い瞳」の男を…

私は今その人物に いや、人ではない。彼は40年前の大戦で英雄と呼ばれた龍人なのだから

と、まあキメてみたんだけど

現在位置 たぶん船の上

状態 縛られて、目隠しされてる

二オイ おっさんの汗、誰かのゲロ

なぜこうなったか その男を知ってるという男／案内してやると言われ／まんまとだまされ／今にいたる

あたし バカ？…よし、いろいろ思い出してみよう

名前 串灘くしなだ 遥はるか

年齢 20歳

その男を搜してる理由 仕事を頼もうと思ってるから

身長 165cm

体重 思い出たくない…

家族 もっと思いついたくない…

友達 もうやだ…

思い出したらなんか疲れた…。はっ！最後の誤解まねいちゃう！ちや、ちゃんと友達いるよ！えーと…6人！！…胸を張って言ってるあたしって…

（家族については…また今度、縄がほどけている時にでも。）

まあ、まあ、まあそれはさておき（おいといていいのかな？）

この状態どうしよう そんなときドゴオオオオン、と船が揺れた  
待って、音的に穴あいたよね。いや、まあ目隠しされてるからよくわかんないけど、ひとつ言い切れる

『速くどうにかしないと明日を迎えられない！！』

そこから先は命優先だったのであまり覚えてないが（あたしの記憶力はそんなに悪く…ないとは言え、言え、言えません。ごめんなさい…でも、緊急事態だからね！？仕方ないんだ！！）遠くから

[illegible]

聞こえたのは覚えている。というかそれしか覚えてない。

始まりは劇的！！（後書き）

続きが出来次第乗せていこうと思います。これからよろしくおねがいします。

目覚めとは絶叫！！（前書き）

2 作目です。

目覚めとは絶叫！！

目覚めるとどこかの部屋のベッドの上だった。  
んっ？よし、状況確認しよう。

部屋 木造の部屋、どう考えても病院じゃあない

部屋の隅 花が飾ってある、しなびてる

目の前 知らない40後半のおっさんが15歳ぐらいの少女を襲つ  
てる

右隣 22 3歳の長い銀髪の男の人がドアから入ってきた

左隣 壁

あれ？もう一度確認してみよう。

部屋 木造

部屋の隅 花しなびてる

目の前 おっさんがはあ、はあ言って少女を襲おうとしている 少  
女恐怖のあまり言葉がでない

右隣 男の人、思考回路停止

左隣 壁

「きやあああああああああああああああああああ！！」

！！！！！！！！！！

あたし、最大級の悲鳴

次の瞬間、目の前のおっさんが部屋の壁をぶっ壊して星になってい  
た…まあ、自業自得？

「人の義妹になにしてんだ！！ この歩く性犯罪者が！！」

と、銀髪のおこは目の前でほしになったおっさんに向かって叫ん  
でいる。



てっ、さっきまでドアのところにいたじゃん！？

距離は約5mそれでも一瞬で移動できる！？と、ツツコミどころ満載のなに一番今どうでもいいことを考える私がいた。いや、まあどうでもよくはないけど…。そんな感じでいたら

「やや！起きたかい。」

と、銀髪の男の人が話しかけてきてくれたので、はいと答えた。

「さっきは叫んでくれてありがとう、助かったよ。それにしてもいい叫び声だったね。」

いや、叫び声ほめられても素直に喜べないんですけど…。

とりあえず愛想笑いをしようと起きようとしたらわき腹に激痛が走った。あまりの痛みにつう…とうめき声をあげてしまった。

「大丈夫…じゃなさそうだね」

痛みの元を確かめると 包帯が巻いてあり、血がにじんでいた。

「！！」驚いたのは私でも、銀髪の男でも、襲われた少女でもなく襲っていたおっさんだった。

さっきはあまりに唐突すぎてちゃんと見てなかったおっさんを見てみると、白衣を着ていた。…この人医者かなにかなんだろうか？というかなんでこの人が私の傷を見て驚くの？その答えは次の一言でなんとなくわかった。

「おお、思ってたよりずっと傷の直りが早いな」どうやら私の傷は酷かったらしい 否、酷すぎるぐらいだったらしい。私はおっさんもとい歩く性犯罪者から今までのことを教えてもらった。

「要するに、用兵部隊 *Rising stars* は依頼であの奴隷商人を捕まえ、人々を解放するも私は重症でやも追えず拠点に連れてきたと…」納得しきれなかったが、今の状況からすれば納得せざるおえなかった。

話に一段落ついたところで銀髪の男が

「そっいや、まだ名乗ってなかったね。俺はリユーク、リユーク・ドラグニティーだ。よろしく。」

と言って握手を求めてきたので、握手をした。

その後彼 リュークは襲はくえんわれていた少女と歩く性犯罪者の名前を教えてくれた。少女は、白炎 愛理あいりおっさんは…村良 清太郎むらら せいたろう平仮名読みすればいつもムラムラしてそうだった。3人が名前を名乗ったので私も

「あたしは、串灘 遥です。」  
と名乗ると

「遥…いい名だな。」

とリュークがほめてくれた。名前をほめられるなんて初めてで思わず顔が赤くなった。それをきずかってかリュークはあえて何も言わないでいてくれた。

落ち着いたせいか、今までの疑問がわいてきた。

おっさんはなぜ吹っ飛んだか？ 義妹って？ なぜおっさんが愛理ちゃんを…それはきつと性犯罪者だからだろう。

その問いに答えたのは愛理ちゃんだった。

「えっと、性犯罪者さんがふっとんだのはリュウ兄がけつとばしたからで、義妹というのはそのままの意味です。」

…いや、それとは思っておっさんを見たら はあはあ言いながら白衣の裏に血をにじませていた。さすがに引いた。前から引いてたけどもつと引いた。ふと、愛理ちゃんの言葉を思い出す。《蹴っ飛ばしたからで》案外事実でした。

**真実は残酷！！（前書き）**

今のところ何とか更新できてる…

眞実は残酷！！

はあああ…。

今ほど泣きたいときはないだろう。

この話をするには、3時間ほどさかのぼる必要がある。

3時間前 そう、それは血を流しながら

「はあ…はあ…」と息を荒げていた40後半のおっさん 歩く性犯罪者（村良 清太郎）が倒れて

「75…62…72…」と数字を言っていたころだ。というか私のスリーサイズだった…。いつ調べたの！？怖い！ 怖すぎる！！調べられるタイミング…あつ！ききき、気絶してたときとか…ま、まま、まさかね？まさかないよね！？それ以外に思いつかない…。ゾワ！！と、悪寒が走った。間違いなくトラウマになった。これ以上その話題に触れたくない…。

おっと、私としたことが違う話題を話してしまった。

ああつ！ 今の話だけでも十分泣けるのに！ お母さん私は汚れてしまったのでしょうか！？…これ以上考えるのやめよう…。

おっさんが倒れてリユークは土葬するか、火葬するかで悩んでいるときに愛理ちゃんがおっさんを部屋から連れ出していった。愛理ちゃん 優しいいいいい！！ 襲われそうになったのに！ 優しくすぎる！ おっさん愛理ちゃんにお礼を言え！！ そして謝れ！そんなことを考えていたらリユークが

「チイッ！！ あの犯罪者め、逃げたか！？」と、どうやら愛理ちゃんが連れ出したのに気づいていなかった。横を向くと、ドアのドアの前に愛理ちゃんがいた。どうやら逃がしてあげたようだった。そういえば、まだ愛理ちゃんをきちんと見ていなかった。（いろいろあつて忘れてた…ごめんよ愛理ちゃん） 愛理ちゃんは白髪で、目の色は薄い青だ。なにより可愛い、女の私ですら見とれてしまう

ほどこに。待った、今の発言で私はレズと認識されたら困る。ちゃんと男のがいいです。私はレズではない！　よし、これで大丈夫だろう。愛理ちゃんの話から、レズ否定話をし終えたころリユークが唐突に

「あっ！そうそう、もう国に戻れないからね、遙ちゃん」と軽く言われ、軽く思考停止した。

**真実は残酷！！（後書き）**

感想を書いてもらえるとうれしいです。

謝りとは誠意!! (前書き)

今回はいつもより少ないです。すいません。

**謝りとは誠意！！**

気がついたらおっさんがあはあ言って私のベットに入り込もうとしていた。リユークの一言でぶっ飛んでいった思考回路は、おっさんの汚い面がこんなに近くにこないと気がつかないほど私にとつて驚きだったということだろう…。

よし、やることをやっておこう

「きやああああああああああああああああああああああああああああああ！！！！！！！！」

愛理ちゃんときよりすごい叫び声だった。

バン！（黒髪の男の子がドアを開ける音）

ドゴ！（おっさんの顔にその男の子の蹴りが炸裂する音）

ドゴオオオン！（おっさんが2つめの穴をつくり星になった音）

「…………」てつきりリユークが来るかと思ったので焦った。何に焦ったってそりゃ…リユークみたいなヤツが出てきておっさんの顔を蹴っ飛ばしたことだよ！

その男の子は18歳ぐらいで赤い目をしていた。

「いやー、その、何と言うか：すいませんでしたああ！」そう言  
うと同時に土下座していた。

ええ ええ ええ ええ ええ ええ ええ！  
いきなり何やってんの!?

「え！？　ちよつ！　何やってるんですか！？　」とんでもなく焦った。年下相手に敬語を使ってしまった。

彼女 白炎 愛理ちゃんにそのシーンを見られていた。…さらば！

！我が人生！！





人とは個性的！！（前書き）

感想おまちしております。書いてね

## 人とは個性的！！

「…何やってんの？ 龍二くん。」と愛理ちゃんは驚いた様子もなく、淡々と聞いていた。

あれ？ 思ってたより意外と大丈夫？ それとも私は彼女の中で始めからそんなポジションなの？

「あの、遙さん。彼、りゅう兄に丁重に頼むよ なんて言われてたものだから、つい。」

いや、そんなこと言われても…。てゆか、ついって…。

私の最近思ったこと ここは変人しかない！！

「と、とりあえず顔を上げて」とりあえず顔をあげてもらおう。そういえばこの子の名前知らないな、さつき愛理ちゃんが『龍二くん』  
とってたけど…。

「君名前なんていうの？」思い立ったらそく行動！それが私だ。

「黒炎 龍二りゅうじです。よろしくおねがいます、ハルさん。」『ハルさん』と、やっと顔を上げてくれた少年によばれた。慣れなれしなこのヤロウなんて思っていました。断じて思ってません。

まあ、いいや。それよりリ्यूクが言ってた『もう国に帰れないから』のが気になるな。龍二くんに聞こうと、思ったら

「よう！放心状態治ったかい！？」と本人であるリ्यूクが飛び出してきた。驚いた。普通に驚いた。だってベットの下から飛び出してくるんだから！！

「どっからでてきんのよ！？」つつこんでしまった。大声出したから傷口が痛い。悲鳴のときは痛くないのに、なんでだろう？そんなことを考えていると

「まあまあ、気にしない、気にしない」と、言ってきた。気にするわ！！でも、今は、リ्यूクの言葉の意味のを知りたいのでよしと

した。

そう言ったりユークの目は、青かった。あれ？最初から青かったけ？気になったので聞いてみた。すると

「いやね、外に遊び言ったときカラーコンタクトしてたから外すの忘れててさつき外したのよ」遊びつてあんた用兵だろ。

まあ、今そんなのより帰れない理由のが気になるので聞いてみた。

このときはまだ最初の目的を忘れていた。わたしはそのうち気がつくであろう自分がとてつもなく馬鹿であることに…

探し人はすぐ目の前!! (前書き)

さあ、なんだかんだいって毎日更新中!がんばっていきます。

探し人はすぐ目の前！！

「いやね、うちこれでも非合法なんだよ。」そんなさざりと言われ  
ても…

「俺ら国家クラスの揉め事処理やてったりするのよ」軽く言わない  
でほしい。というか国家クラスですかい！！ 私そんなすごいこ  
に  
にいるんすか！？ でも待つてどんな揉め事を？ もしかしたらか  
なりやさしいことだったり

「例えば、テロ犯を締め上げたりするんだよ」夢が消えた…

「用兵つてそんなことしましたっけ？」疑問なんで聞いてみた。（  
あとから思うと私適応早！！）

「金さえもらえれば」ビジネスでした。

リ्यूクはベットの下から出てくる気配から起き上がって

「あんまりうちの存在知られると厄介なんだよ」と真面目な顔で言  
い出した。

「うちは生きていくために金さえもらえりやある程度のことはする。  
これでも、こんなんでも、天空を支える1人の王だからね。それに、  
ここは俺がつくった居場所なんだ。ここがすべてと言うやつも少な  
からずいる。まあ、500人ぐらしかいないんだけどね。」王？

なんか引つかかる。何でだろう？ そんなことを考えて出してたら  
「ところでよ、なんであんなバカにつつかまってたんだい？」

「何って、そりや人さがしを…」あれ？ 特徴は銀の髪、青い瞳。

リ्यूクの特徴は銀の髪、青い瞳。コイツじゃん！！いや、待て  
下手したら人違いかも。恐る恐る聞いてみた。

「ね、ねえ。40年前の大戦に出てた？」すると

「ん、ああ。出てたよ。よくしってるね。もしかしてストーカー？」

「・・・いたああああああ！！！！！！！！！！」

「うおっ！？」リ्यूクが驚いてた。いや、まあ、いきなり声上げ  
たからかな…。

そして、私は悟った。私はとてつもないバカだ！！！！

追憶とは悲しきもの!! (前書き)

日々努力してポイントをつけていただけるようがんばります



追憶とは悲しきもの！！

「リユークって何歳？」

ふと疑問がわいた。だって姿はどう見ても20歳前半なん。

「64だよん」

思考が途中で終わった。本当に軽く言うよね…コイツ。…あれ？

64歳ってジジイじゃん！！

「驚いてるね。まあ、無理ないか、俺不老なのよ」

…いやいやいやいやいやいやいやいやいや、不老ってふと思いついた。コイツ半分龍じゃん。…人間の常識通じねえ！！

「…先に言うておくが普通龍だって老いるからな」

心読まれてる！？しかし、そんなのお構いなしに続ける。

「リユークとはね、最強になるためにいるんだよ。だから次が出てくるまで、死ねないようになってるんだよ。まあ、正確には不老半不死なのよ。だから心臓や脳をやられりゃ死ぬんだよ」

ま、まあこれ以上考えると頭がおかしくなるからやめとこう。

「ねえ、私は仕事を依頼するためにあなたをさがしてなの」と本題に入ることにした。

「いいぜい」

「実は…え？」

軽くOKされた。何も話してないのに、まあいいや。もう、突っ込むのやめよう。

「でさ、内容は？」

順番が逆だよ

きたのえちよう

「…えつと北之江町きたのえちようという田舎で大量虐殺があつたの知ってますか？」

「まあ、結構有名だからね。」

「その犯人を 殺してください。」

追憶：串灘家

私の家族は私を含む4人家族

弟、私、父、

普通のどこにでもある家族

北之江町に住んでいた

私は大学に行くため東京に行っていた

去年、事件はおきた

去年の7月10日22時にそれは、大量虐

殺はおきた

北之江町にいたすべての

人間は死んだ

鎌で切られ

たあとがあつたらしい

私は一夜にして家族を失った

憎しみは黒き塊!! (前書き)

めざせ! 毎日更新のもとがんばっております。

憎しみは黒き塊！！

「なるほどね。ようするに家族の敵討ちしたいと…」

「お願いします」

頭を下げをお願いした

「いや、だから受けるから、その依頼。それに、その犯人を俺は知ってるしね」

「！？」驚きを隠せなかった。一体誰が！？それが、それしか頭になくなった。

「誰なんですかそいつは！？」

次の瞬間には傷の痛みを無視してリユークの首元に飛び掛っていった。そして、リユークは私の疑問にいつものように

「俺の5人の弟子のうちの一人だよ」

と軽く言った。私は言葉を失った。その後に

「まあ、途中でいなくなったんだけどね」

と続けた。

「わかりました。」

今こんなことを話してもしょうがない。私がリユークから手を離すと

「先に言っとくけど金は今回いらないから」

「へ？」

意外な、意外すぎる言葉がリユークが言った。

「今回は俺の弟子が起こしたことから、師匠がケリつけないといけないからね」

あれだけ「金」と言ったから今回、金を取るかと思った。

「あ、遙ちゃん、ちゃんと君も現場に行くんだよ」

「！？ 本気ですか！？ 私足手まといになりますよ！！」

焦ったけど、また軽く言われたから冗談かと思ったら

「本気だよ。君も来るんだ、遙ちゃん。そして見届けるんだ、君の家族を殺したやつ シンやいや、『深淵の王』アビスの最期をね。」

「私の家族を殺したやつの名を言ったりユークは残酷にも、無邪気にも、笑っているように見えた。」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2782m/>

---

Rising stars

2010年10月16日13時47分発行